

俳句同好会

世話人 石崎陵南

社団法人京都電業協会の俳句同好会も回を重ねて、第百五十五回を開催する事ができました。

現在会員六名で吟行、句座を月一回いたしております。回数も経て高齢化してまいりましたが、

俳句をやっているおかげで、ぼけもせず楽しくやっております。

初心者を含め入会をお待ちしています。

第百五十回 平成十九年三月二十九日(木)

兼題 『如月』『春の川』『雛』『燕』『木の芽』

『目刺し』と当季雑詠

吟行 松ヶ崎大黒天涌泉寺(都七福神の一つ)
句座 「サンマルク」北山店

兼題句

一人居に 雛を飾りて 酒とする 林

ひねもすの 雨に燕 つばくろ ひと休み 陵南

口ずさみ つゝ散歩する 早春賦 陵南

控目に そつと咲きいる 梅三輪 宮本

よきことを 寿く如き 雪柳 林

暖冬で 早や夏衣料 店頭に 宮本

力士乗り 来し地下鉄や 春の場所 下里

割れし尾の 黒衣の珍客 くろこ 初燕 三木

木の芽あえ 芽を摘む指先 山椒の香 宮本

朝飯に 目刺のわか干し あぶりけり 下里

目刺焼く 故郷を出て いで 六十年 三木

塀の上を 通る恋猫 二対一 紫香

吟行句

訪ね来し 大黒境内 花は二分 三木

第百四十九回 平成十九年一月三十日(火)

兼題 『冬の空』『枯木立』『粕汁』『賀状』『初湯』

『千両』『若菜』と当季雑詠

吟行は取り止め新年句座としました

句座 御狹鍋の「北斎」(東山区ぎおん繩手)

兼題句

あたたかき 手づくり賀状に 浮ぶ顔 三木

初夢にと 千両生けし 枕元 宮本

初弘法 紅毛カップル 買う古着 陵南

柿すだれ 夕日をあびて 鎮もれる しず 林

峠越しに はしやぐ年増の 初湯連れ 三木

薄日さす しじまに咲ける 薺椿 林

近頃は はらいのけ度し 来る年を 宮本

グラタンの 牡蠣 かき ふつつつと 眩けり くら 紫香

七草の 揃いし粥に 無き話題 三木

第百五十一回 平成十九年五月八日(火)

兼題 『日永』『草餅』『子猫』『端午』『牡丹』

『新茶』と当季雑詠

吟行 「大石神社」「岩屋寺」大石内蔵助関係
句座 山科の「魚善」

兼題句

春灯 辞書をひく手に 天眼鏡 陵南
飲みなれし ペット茶止めて 新茶とす 下里
草餅を ほうばり過ぎて ロゴもる 宮本
デバ地下の 新茶の声に 味見せり 宮本
閉じこめし 子猫顔出す 破障子 三木
次々と 昔話の 日永かな 下里

第百五十三回 平成十九年八月二十八日(火)

兼題 『星月夜』『川床』『夏菊』『枝豆』『墓参り』

『白粉花』季語を入れて『電車』『靴』と

当季雑詠
吟行は取り止め句座のみとしました
句座 「かに家」東山通四条下ル

兼題句

きゝすぎに 移りし車両は 弱冷車 宮本
蝉しぐれ 法師蝉の音 まじりおり 下里
盆なれば 墓参一列 続きけり 三木
大雷 音のみ残し 通りすぎ 下里
それなりの 息災報じ 墓参かな 三木
野仏の 夏菊一輪 人気なし 三木
炎昼に 鉄路の草は しおれけり 下里
水蓮の 花咲く堀の 水面かな 陵南
低き声 だぶだぶ顎の 墓蛙 紫杏
大師堂 薨大棟 夏日射 紫杏

第百五十二回 平成十九年六月二十六日(火)

兼題 『夏木立』『風薫る』『夏服』『父の日』『苺』

と当季雑詠

吟行 「本能寺」織田信長公で有名
句座 「京新山」

兼題句

母の日に 父のもあわせ 贈られし 陵南
夏服に 着替えて気付く たたみじわ 宮本
薫風を 仏間に入れて 僧を待つ 陵南
夏木立 屋根を浮べる 六丁目 下里
梅雨ながし 日々樂し これ余生 紫杏
畦道に 紅散りばめて 草苺 三木
青芝を 一筋土竜 持ち上げし 紫杏

第一百五十四回 平成十九年十月三十日(火)

第一百五十五回 平成十九年十二月五日(水)

兼題 『露』『芋』『秋風』『蛙』『長月』『運動会』
と当季雑詠
吟行 千本えんま堂(千本鞍馬口)
句座 「萬重」

兼題句

コスモスを 割る一筋の 道歩む 紫杏
初堀の 土の温みや 芋畑 三木
長月の 海神まつり 遠太鼓 下里
鈴虫に 目やり耳やり 声を聞く 宮本
露けしや 庭より摘みし 今朝の供花 陵南
運動会 追う目の先は 孫ばかり 宮本
芋の葉の こぼれそうなる 露の玉 陵南
纏れ立ち 風に別れし 秋の蝶 三木

吟行句

秋空に 供養塔かこむ 藤袴 陵南
秋風や ビルの谷間の 大観音 下里

兼題 『初冬』『神の留守』『落葉』『短日』
『冬の空』『雑炊』『鱈』『障子』と当季雑詠
吟行 赤山禅院 左京区修学院赤山町
都七福神の福祿寿で有名
句座 「京新山」

兼題句

何祈る 神は出雲へ 旅道中 三木
マフラーの 似合う バイクの僧走る 紫杏
両側に 落葉散り敷く 野道かな 陵南
棒鱈は たてに置かれし 鮮魚店 陵南
猫出入り すきま風来て 貼る障子 宮本
あるがまま 頭寒足熱 床暖房 陵南
年重ね 便座のぬくもり 有難や 林

吟行句

冬天へ 頭すくめし 福祿寿 三木
ねむげなる 念仏唱名 散るもみじ 紫杏
枯れ葉舞う 十六羅漢 毅然たり 宮本
ふり返る 赤山禅院 燃ゆる山 下里

俳句同好会参加者

(株)テリフ 林 治吉
(株)オリチナル電設 石崎 陵南
宮本電気工事(株) 宮本みつへ
川鉄電設(株) 下里 尚信
(株)トモエ屋 星野 紫杏
ゲスト参加 三木 一義

平成二十年一月
協会広報誌 第四十四号掲載

俳句同好会

世話人 石崎陵南

第百五十六回 平成二十年三月十三日(木)

第百五十七回 平成二十年四月二十二日(火)

社団法人京都電業協会の俳句同好会も回を重ねて、第百六十一回を開催する事ができました。

現在会員八名に増員し吟行、句座を月一回いたしております。四月に三和電気工業(株) 小野俊一社長、十二月に山科電気工事(株) 山科隆雄社長に入会して頂きまして、平均年齢も若返り、楽しい句会となりました。

初心者を含め入会をお待ちしています。



平成20年4月22日 今宮神社にて

兼題 『故 星野紫杏さんの追悼句』と当季雑詠

吟行は取り止め句座のみ

句座 「かに家」東山通四条下ル

追悼句

博学の師 立春を待たずに 忽然と

三木

冬の朝 友の柩に 軍艦旗

陵南

訃報来て 恩師見送る 雪の中

宮本

料峭の 訃報思わず 聞きなおす

下里

満票の 牡蠣のつぶやき 絶句とは

三木

兼題句

薑味噌や 母の十八番を なつかしむ

下里

わら舟に 誰の身代り 流し雛

三木

福引や 当りて重し 米袋

陵南



兼題 『日永』『春の夜』『蛤』『鶯餅』『木蓮』と

当季雑詠

吟行 「今宮神社」健康 家業繁栄のご利益

句座 「萬重」今出川大宮上ル

※今回から小野俊一さんが参加されました。

兼題句

支離滅の 夢にぐったり 夜半の春

三木

晚餐の しめは蛤 うしお汁

陵南

乗って舞う 花びら一つ 春風に

宮本

国境 越えば山里 遅桜

陵南

渡りゆく 横断歩道も 花吹雪

下里

ねるでなし 起きるでなしの 遅日かな

下里

ホーホケキヨ 鶯餅に 陽を感じず

小野

吟行句

万緑に 包まれ一会 地藏尊

三木

登りつめ 今宮宮の 楠若葉

下里

第一百五十八回 平成二十年六月十二日(木)

第一百五十九回 平成二十年七月三十一日(木)

第一百六十回 平成二十年九月二十五日(木)

兼題 『立夏』『入梅』『薬の日』『雨蛙』『鯉』

『岩つつじ』と当季雑詠

吟行 「石峰寺」伏見区深草石峰寺山町

この寺に隠遁した有名な画家 伊藤若冲が
作った羅漢石仏の隠れたる名所で皆さんに
喜んで頂きました。

句座 「花斗」京阪三条駅東すぐ

兼題句

沓脱くつぬぎに 何を思案や 雨蛙 三木

梅雨最中さなか 部屋干シぼしシャツの 数がふえ 下里

岩はだに もえるつつじや 川下り 寿々代

雨蛙 親の行方は 知らせれず 三木

立夏とは 名前ばかりの 肌寒さ 宮本

尼僧住む 庵いおりの裏に 岩つつじ 陵南

吟行句

石峰の 羅漢めぐりて 梅雨晴れま 下里

らんさん 梅雨の晴れまで ニッコリと 宮本

若冲の 墓見おろせり 夏の京 陵南

紫陽花の かげで微笑ほほえむ 石ほとけ 寿々代

深草の 里はあじさい 石峰寺 下里

兼題 『夏』『蚊』『祇園祭』『簾』『烧酎』と

当季雑詠

句座 「京新山」

兼題句

宴会で 烧酎しょうじゆばかり メタボかな 宮本

異国人いこくびと くじ改めの 晴れ姿 寿々代

まぼろしの 烧酎くれし 友逝けり 陵南

石佛の かげでエサ待つ 蚊の集団 寿々代

息つめて 頬ほほの蚊一発 打ち損じ 三木

古簾 つくろい掛ける 裏うらの窓 下里

夏本番 百花繚乱 発泡酒 三木

命綱 張る屋根方や 鉾団扇 三木

麻暖簾のれん かけて老舗しよせの 和菓子店 陵南

烧酎が 話題集める 遠忌おんきかな 下里

七夕に 何を託すや 老いてなお 寿々代

兼題 『残暑』『木槿』『地藏盆』『秋刀魚』『野分』

『敬老の日』と当季雑詠

吟行 「廬山寺」(紫式部邸宅址)

句座 「かに家」東山通四条下ル西側

兼題句

敬老日 じいさんマークに 道ゆずり 下里

くれにけり 色も艶よし 秋茄子 陵南

会社来て 残暑感じ 疲れ増す 小野

まじろみと 残り木槿の 午睡かな 下里

朝開き 元気づく色 木槿かな 小野

ことわれず 席ゆずられし 敬老日 陵南

通り雨 受けて色増す 花木槿 寿々代

亡き句友 教えてくれし 木槿垣 陵南

吟行句

寺町は 俳人ばかり 萩の風 三木

萩垂るる 梨の木の宮 風な風いで 下里

白砂に 式部をしのび 咲く桔梗 寿々代

萩こぼれ 眞昼の風の やさしさよ 寿々代



第百六十一回 平成二十年十一月二十五日(火)

兼題 『晩秋』『冬めし』『湯豆腐』『顔見世』

『落葉』『山茶花』と当季雑詠

吟行 「光悦寺」「源光庵」「常照寺」の紅葉狩
句座 「萬重」今出川大宮上ル西側

兼題句

いくたびも 本重ね読み 暮れの秋 小野

献立の 決まらぬ夕餉 むかご飯 寿々代

顔見世の まねぎに阿国おくに 落着かず 三木

晩秋や 頼り頼られ 老二人 陵南

味よりも 先ず色めでる 富有柿 陵南

一山の 紅葉水面をみなも 朱に染める 寿々代

吟行句

光悦の 垣根にからむ 紅もみじ 下里

禪林の 二窓に迷い 暮早し 三木

風吹いて 落葉の乱舞 昼下がりに 宮本

晩秋や 一鳴きの鳥 空を切る 下里

光悦の かえでもみじの 晴れ舞台 宮本



俳句同好会参加者

(株)デリフ 林 治吉

(株)オリチナル電設 石崎 陵南

宮本電気工事(株) 宮本 みつへ

三和電気工業(株) 小野 俊一

番号(野一)

山科電気工事(株) 山科 隆雄

川鉄電設(株) 下里 尚信

ゲスト参加

三木 一義

番号(窓外)

三木 寿々代

星野 アサ

平成二十一年一月

協会広報誌 第四十八号掲載

俳句同好会

世話人 石崎陵南

第百六十二回 平成二十一年一月二十八日(水)

社団法人京都電業協会の俳句同好会も回を重ねて、第百六十七回を開催する事ができました。

現在会員八名で句座、吟行を開催しています。

平成二十一年一月の句会より、日本システム工

業株の三井慧泉さんに入会して頂き、又、十一月

十二日の俳句会には佐伯会長の特別参加もあり、

楽しい吟行と句座になりました。

初心者を含め入会をお待ちしています。



平成21年11月12日 圓通寺にて

兼題 『障子』『万両』『鴨』『河豚』『煮凝』
『冴ゆる(月、星等)』『マスク』
『年末年始季語全般』
句座 「京新山」川端通り四条上ル東入

兼題句

満票の牡蠣のつぶやき一年はや	窓外
河豚鍋にブーツが並ぶ出会かな	寿々代
若水や天地静寂の澄みわたる	慧泉
障子張る妻の背中の丸さかな	陵南
十八番みな軍歌なり年忘れ	窓外
たづね来て弥陀仏かくす白障子	下里
昼酒に鯛の煮凝妻不在	陵南
大皿に透けてっさや女の陣	窓外
万両の朱よみがえる苔のうえ	寿々代
月冴ゆるかかる雲間に急ぎ足	野一
河豚鍋や先ず長老が箸をつけ	陵南
木漏れ日のあたりに古き障子あり	爽風
スッピンでマスクで変る美人顔	宮本
雑煮箸輝濃くはしる夫婦椀	窓外

着ぶくれて一息入れる散歩かな
順番を目であらそうやマスク顔
下里 陵南

冬の句座厳しき評の師を偲ぶ
綾南

羽根つきも凧もみられぬ今朝の新春
寿々代

猫やぶる障子張替え春を待つ
宮本

宛名書く過ぎし思いが年賀状
下里

千年の古都の流れや鴨遊ぶ
寿々代

マスクとり互にかわす京ことば
綾南



第百六十三回 平成二十一年三月二十四日(火)

兼題 『啓蟄』『水温む』『比良八荒』『春場所』

『梅』『田楽』『露の墓』と当季雑詠

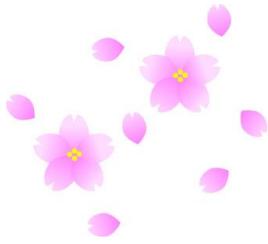
吟行 「知恩寺」 今出川通り東山東(百万遍)

僧空円が疫病流行のとき百万遍念仏を唱えた。

「白峯神社」今出川通り堀川東

プロ選手も参拝する球技の神様。

句座 「萬重」大宮今出川東



兼題句

第百六十四回 平成二十一年四月二十三日(木)

第百六十五回 平成二十一年六月十八日(木)

路の墓しかと見とどけ露天風呂
相乗りの人力車行く春の道

宮本
綾南

この道の果てに老いあり春の雪

慧泉

水ぬるみ禁止の池に大公望

下里

啓蟄や垣根超えくる笑い声

窓外

水温む河原に鷺の二歩三歩

綾南

爺媼じじばばに何度も見せるランドセル

爽風

梅咲きて鳥それぞれに日向ぼこ

野一

京料理箸をつけます露の墓

宮本

吟行句

知恩寺に心安らぐ春見つけ

宮本

百万遍念仏唱えし春の寺

綾南

兼題 『桜』『轉まわ』『筍』『烏賊』『薫風』と

当季雑詠

吟行 「京都市立 深草墓園」「深草石峰町

竹や松林が風にゆれる静かな所で、

故 星野紫杏さんが眠っておられます。

「宝塔寺(極楽寺)」「伏見区深草宝塔寺山町

深草石峰寺の南の、京都市内最古の多宝塔と
源氏物語ゆかりの寺で有名。

句座 「清和荘」伏見区深草越後屋敷

兼題句

どこに行く乗ってみたいな花筏

宮本

裏山の若竹ほとり皮をぬぎ

窓外

鳩にはかす潜き経て浮び居る春の湖

慧泉

轉りを残して駅舎離れけり

慧泉

烏賊釣りの船あわただし薄暮かな

寿々代

吟行句

多宝塔春のひざしにりと建つ

宮本

風薫る時の色聞け多宝塔

慧泉

深草の若葉の墓園に逝き給う

綾南

兼題 『梅雨』『新緑』『薔薇』『衣更え』『風鈴』

『蛭』『汗』『夏の料理全般』と当季雑詠

吟行 「京都市立植物園」

兼題句

汗流しここぞとばかり見栄を切る

宮本

風鈴を鳴らした風がほほなでる

野一

西日受け水面輝く夏の川

綾南

雨がさを日がさにかえる梅雨晴間

寿々代

竹林の静寂切り裂き梅雨の雷

窓外

風鈴は我が家の風の通り道

綾南

風鈴の音追ひかけて通り雨

慧泉

衣更え口紅ひくも一人かな

寿々代

老いて尚はなやぐ心衣更え

綾南

旅籠はたご継ぐ後家の腕前鱧料理

窓外

風鈴と共に待つ身の風ほしさ

宮本

衣更え捨てられなくて箱のすみ

寿々代

吟行句

新緑の木漏れ日に聞く鳥の声

野一

人生も薔薇もいろいろ植物園

綾南

第百六十六回 平成二十一年九月二十九日(火)

第百六十七回 平成二十一年十一月十二日(木)

屋台店早仕舞いする野分けかな

野一

兼題 『残暑』『赤蜻蛉』『菊』『秋鯖』と

当季雑詠

吟行 花園「法金剛院」(通称 花の寺・蓮の寺)

句座 「萬重」大宮今出川東

兼題 『秋思』『虫』『時代祭』『野分』

『道十季語』と当季雑詠

吟行 「圓通寺」左京区岩倉幡枝町

兼題句

天地人三本仕立ての菊愛でる

爽風

紅萩の撓みて門灯隠しけり

綾南

赤トンボ葉裏に今日の羽根たたむ

窓外

風あおり野菊一輪山日和

野一

赤蜻蛉しばし我が身を弄べ

慧泉

人氣なき路地の地蔵に露宿る

綾南

吾亦紅おしゃべりつきぬ二人連れ

寿々代

風抜ける廊下にそつと菊一厘

爽風

野菊挿す小さき花器選ぶ朝

寿々代

朝露に光り放つや萩の花

宮本

吟行句

弥陀池に己が身を折りて破れ蓮

慧泉

水枯るる青女の滝に水引草

綾南

夏がれの院の弥陀仏花の寺

下里

が素晴らしく、秋の庭園観賞としては皆様におすすめます。

句座 「京新山」川端通り四条上ル東入

兼題句

列島を呑みこんでゆく野分けかな

爽風

空座席目で勝負するマスク顔

下里

帰りきて阿修羅しばしの秋思なる

窓外

高き天勤王隊の笛進む

爽風

柿の実を少し残して鳥回向

下里

峽の空秋思におはすや石仏

窓外

免許証返すか八十路秋思かな

綾南

むかご有り無人売場の片隅に

寿々代

風仕業枯葉舞う々並木道

宮本

闇量かる汝等も命よ虫の声

慧泉

秋晴れや歴史絵巻の列続く

綾南

散る紅葉掃かず眺める思いやり

寿々代

軋しみ戸の動きをゆるり虫の声

下里

若き日に妻と歩きしすき道

爽風

鯖街道大原女いそぐ野分かな

綾南

吟行句

あかもみじすきまにみえる比叡山

佐伯

紅葉さす木漏れ日ゆれて燃ゆる苔

爽風

わけ入りて圓通寺道紅もみじ

下里

借景を詠みこむ一句秋深む

窓外

比叡背に紅葉はゆる離宮跡

寿々代

枯山水紅葉さし見る比叡山

綾南

苔青く紅葉さえる圓通寺

宮本

眞向いに比叡の山置き紅葉狩

窓外



追記

二十三年前に発足したこの句会に第一回より入会させて頂き、十年前から世話人を長らくさせて頂きました。八十歳を超える高齢となり、世話人を引退させて頂くこととなりました。

次回より小野前会長と、三井 慧泉さんに世話をさせて頂くことになりました。

俳句を勉強したおかげで、呆ける事なく現在に至っています。今後も会員として出席させて頂きたいと思っています。

石崎 綾南



俳句同好会参加者

宮本電気工事株 宮本 みつへ

三和電気工業株 小野 俊一(野二)

山科電気工事株 山科 隆雄(爽風)

日本システム工業株 三井喜代治(慧泉)

株オリチナル電設 石崎 一郎(陵南)

川鉄電設株 下里 尚信

特別参加

東邦電気産業株 佐伯 希彦

ゲスト参加

三木 一義 (窓外)

三木 寿々代

星野 アサ

平成二十二年一月

協会広報誌 第四十九号掲載